

第四章 近世の文化と信仰

一 文 化

(一) 文化のひろがりと教育

文化の道 近世の文化は、東北には江戸を中心として伝えられた。慶長八年（一六〇三）徳川家康が江戸に幕府を開いて以来、明治維新を経て現在まで江戸＝東京が政治・経済・文化の枢軸としての活動をつづけている。

他方、古くからわが国における文化の中心は、京都を擁する畿内地方にあった。京都は皇城の地であり、仏教各宗派の本山も集中して、伝統工芸・諸技能の家元が朝廷を取りまく公卿たちに独占され、官位・榮譽としての綱位、法橋・法印・法眼など授与権を掌握する所であり、諸技能・工芸練磨の地であったから、天下に名を成そうとする人々はみな京都をめざした。

また京都は名所旧蹟に富み、神社・仏閣に詣でる人々が集中した。交通機関の未発達時代で、人々はみずからの足で大地を踏んで歩かねばならなかったが、技能に信仰にあこがれた当時の人々は、京都と江戸から数々の文化を手ずから運んだし、また途中の諸国の文化とも交渉をもった。それは道路を媒介としてなされたのであり、近世において、交通路は文化の路にほかならなかった。

矢吹の文化

矢吹における文化の路は、幕府の五街道政策により完成された江戸から白坂までの奥州街道の延長上に、白河より青森までが奥州道中として、南から北に貫通している。慶長九年（一六〇四）に完成されたこの道路が矢吹を宿駅とし、さらに、会津よりは山間を縫って東に向う。諸道路が矢吹に集中した。

十世紀の『和名抄』にみえる駅家をたどって、棚倉・塙と久慈川沿いに下る水戸街道の分岐点でもあり、また近世の奥州道中の出来るまでの古代から中世には、白河の関をこえて奥に通じる旗宿街道が、中畑・三城目と矢吹地内を通ったとみられる。この街道は、奥州道中が白坂通りの本街道として武家・公用旅行道となつて以来、脇街道として商業・廻米など生産商品輸送の道として生きつづける。

これら主要街道を通じて、近世の文化が矢吹にもたらされた。田中丘隅は『民間省要』のなかで、街道は血管と同じく休みなく動くことよって、国の政治・経済そして文化も栄えるといっている。

矢吹の近世文化は、このような主要街道によつて運ばれて定着し、そこから生まれでたものである。

教

育

近世初期、幕藩制の成立から確立期に至るまで、地元には目立つものはない。城下町中心の文化で、白河からの侵透が主であった。

このころは主に寺院僧侶による文化の伝導が寺院と信仰を軸とし、名主庄屋層の人々はその家職を守るために、読み書き・そろばんの習学が行われるのが主であった。いずれも矢吹に含まれる旧村毎の寺院の僧たちが教えている。年貢勘定、宿駅業務および村の諸役を勤める村役人層の人々は、文字・そろばんの修学につとめたが、一般庶民では商家をのぞけば、農工ともに学問は無駄なものとしていた。近世初期における熊沢蕃山・山鹿素行の学問・文化の担い手は支配者のもので、一般庶民のものではなかった。

元禄期は商品貨幣経済の侵透、天下太平の世となり、実力を蓄えた町人・富商は、学問・遊芸に力を注いだ。町人文化といわれる国学・俳諧・歌舞妓・物語りが大きな勢力をもってくる。当時の萩生狙来・大宰春台などが、学問は士大夫のものとしているが、狙来一門と違った見方をした室鳩巢一派は、庶民教育の重要性を強調している。

学問が政治と直接に結びつき始めるのは享保期以降、幕藩封建制の動揺期であって、真剣に学問を実学として政治に利用する傾向が強まる。幕府はじめ諸藩でも、学問巧者な者は幕藩制の崩壊期を迎える時代には、封建身分制の枠をやり、学者として世に立つことができる傾向が一般化する。これと関連して、庶民教育も発達した。寺院・社家・村名主の所で読み・書き・数学などが社会情勢の要求によって教習され、寺小屋教育が普遍化したのである。

教授課程は、片仮名・ひら仮名のいろはより始まり、十干十二支・国づくし・名前づくし・消息往来・古状揃・凡月づくし・月づくし・千字文などで、幼少からは初学として数づくし・いろは文字から入り、やがて和歌・漢学・国学・和算と余力あるものは、好みによって修得して行ったが、庶民教科目は童子教・実語教・商売往来・職人づくし・庭訓往来・農業往来・御成敗式目・加算減算を多く得目としていた。

これら教育のなかで特に習字は重視され、幕府のもっぱら採用した「御家流」の書法が大きく普及した。いろは文字から、各種往来物・漢学・国学、とくに合理的な和算の普及は、庶民に自意識を育て、自己の境遇・社会の姿を直視させる作用をもたらした。さらに和歌・連歌・俳諧・立花・謡・礼法・舞などにすぐれた才能を発揮し、封建社会の身分制のわくをのりこえて、支配階層の人々の師表ともなる人が多く出た。

矢吹地方では、奥州道中筋の宿駅農村であり、そのような人物は出ていないが、大佛寺・長徳寺・澄江寺・正福寺・景政寺・城見寺・三城目澄江寺・慈眼寺などの住僧や、修験宗の本山派、当山派僧侶によって、教学が行なわれたことは間違いない。幕末期の寺子屋教育の普及・浸透によって、村役人層のなかでは、白河・水戸・笠間・黒羽などの学者に入門して勉強する風潮が生じた。当時のこれら人々の学問に対する考えは、天保八年（一八三七）仲秋、中畑村岡崎長左衛門保光が子孫に遺した「子孫教訓禁誡鑑」に次のように示されている。

若年の旅、芸能不相候テ叶ハザルモノハ手習・学問・算盤・算用ハ幼年ノ折ヨリ出精致候事専要ニ候、蹴鞠、茶之湯ノ事ハ高位ノ人ノ楽シム芸ニ有之候得ハ、不学候共苦シカル間舖候、小笠原謝礼、臈方折方、碁・将棋、立花生華、歌、三味線等ノ芸、暇有之時ハ少々相習候テモ可レ然哉、其品々芸能ニ耽相泥候事、以ノ外不レ宜候、

とある通り、岡崎家の当主として学問への心掛けが子孫に遺されている。

幕府は八代將軍吉宗の時代に「六諭衍義大意」を版行して庶民教育にとりこみ、幕末期白河藩では藩校立教館と併せて、松平定信は郷校として敷教舎を須賀川に設け、敷教条約七章を藩儒広瀬典に作らせ、領内庶民教育の拠点として領民の生活と直結していた。身分に応じた盆暮の挨拶、一月二日の書初め、一月十五日のドレド焼き（書初めを焼き灰が高く上があれば、字の上達となるとよころぶ）、一月二十五日には学問の神菅原道真を祭る天神講、寺では文珠講を行い、七夕には短冊に字を書き上達を祈願するなどの行事が村の行事となり、生活の中に溶けこんでいた。

これら庶民教育の発達は、領主にとっては儒学に根ざした道徳教育を主眼として展開し、農民にとっては生活のために必要となつて来たことに原因する。農村経済の不安・貨幣経済の侵透に対して、庶民に判り易い心学が、とくに白河藩では説かれ、庶民にも受け入れられていた。

(二) 文 芸

文 芸 の 伝 播

地方文化の拠点となる処は、多くは街道宿駅・河川舟運の要地であり、さらに換金農業の集散、製造地帯にあった。矢吹地方では、中世以降の主要な関東と奥州を結んでいた旗宿越えである関街道に沿った、阿武隈川沿岸部に文化的な素地があった。三城目・中野目・中畑などの地がそれである。これらの地は、近世以降、奥州道中の宿駅とされた矢吹が、武家と武家荷など人馬継立を主要な任務として設けられた政治性村落であるのに対し、主要街道としての位置をこれにゆずった関街道に沿っていた。関街道は、関東と奥州を結ぶ廻米をはじめ、商業商品である生糸・紅草・藍・馬・煙草など商品の江戸登りの道であり、江戸からはあらゆる商品の流入路でもある街道として、経済路線として、活発な往来をもった。

地方文化の伝播は、商業取引関係・交通により、さらに社会状況の安定、信仰にともなう遠隔地旅行の可能な時代背景が、近世における文化の流通となった。中央における文化人たちの旅行も、街道沿線・港湾などの宿駅などを中心に刺激

を与え、近世の中期以降には出版書籍が、安価に製作・販売されたことも地方の文化に貢献している。文字を愛し、文芸を嗜んだ地方の人々は、富農・富商の限られた人々であったが、安価な書籍・出版物であっても容易に入手できず、多くは自分で写本として製本して勉強している。そのほか訴訟・領内年貢米金上納・事務用などの上京、伊勢・熊野・金毘羅参詣などの土産には、目方のない書籍・草紙などの文学ものが搬入されて、地方文化に影響を与えている。

寺子屋が寺院であれば、仏教臭の強いものとなり、神主であれば国学・和歌が主となり、庄屋・名主などに教えられると俳諧・和算などの実学的傾向となるという差はありながらも、初歩的な漢学・国学・和歌・俳諧・生花・礼法などは、村内の有力富農・富商たちの必須の教養として、生活の面で重んじられるに至った。

中央の文化の影響は、須賀川における相楽等躬のような、地方文化の担い手を生む素因となり、次には藤井晋流が出現させた。以来、須賀川文化は二階堂桃鼠・石井雨考・市原たよと全国俳壇に著名な人物をうみ出し、鏡沼には常松菊畦など、農民でありながら時の藩主松平定信に愛される文学者や、社会文化に尽力する内藤平左衛門や、画人亜欧堂田善などを生んだ。矢吹町の地域には、このような人々がみられない。同じ領内で隣り合いながら、何故に育たなかったのだろうか。当時の矢吹は、なお須賀川ほどの余裕をもたなかったことが、大きな原因であろう。

文芸作品の 中の矢吹

矢吹の名が文芸作品のなかにみえるものを取り上げよう。

慶長六年（一六〇一）、加賀百万石の太守として知られた前田利家の甥で、滝川一益の子とも伝えられる前田慶次郎が、京都から米沢に下向する道々に書き記した日記が、米沢市立図書館に『前田慶次道中日記』として残されている。かれは武功に隠れない人でありながら、和歌・連歌・仏典・古典に通じた人で、茶の嗜みもある風流人でもあった。この『道中日記』に、踏瀬の磨崖仏に詣で、

藪木（矢吹）の里までと思ひつるに、とどまるへき宿もなく、いはせに行、

とある。慶次郎主従が泊る宿も無かったのが慶長六年当時の矢吹の姿であった。「いわせ」に行くとあって須賀川に泊ったのである。

次は『日本行脚文集七』に、貞享四年（一六八七）俳人大淀三千風が矢吹を通過する文が収められているが、矢吹にいつての句はない。二年後の元禄二年（一六八九）、奥の細道行脚の松尾芭蕉と河合曾良の師弟が、四月二十一日矢吹に泊ったが、泊った家は明らかでない。曾良の随行日記には、「矢吹へ申ノ上越ニ着、宿カル、白河ヨリ四里」とだけある。

同九年（一六九六）三月、天野桃隣が、奥の細道の跡をたどり、同十二年（一六九九）相楽等躬が『伊達衣』を出版する。『福島県俳人事典』によれば、三城目伊藤氏として朴探・松声の二人がこれに句をよせている。翌十三年には、等躬が『一の木戸集』を出版するが、このなかに三城目の東窓の句が載っている。以来芭蕉の足跡を慕った俳人たちが矢吹を通過する。享保十七年（一七三三）大坂の児島書房『奥の小日記』、元文三年（一七三八）江戸の山崎北華『蝶の遊』が出され紀行文もある。

元文二年には三城目の御霊神社に、句額が奉納されている。三城目伊藤氏の奉納で三城目連・神田連などの俳社が、須賀川俳壇の影響化に、ようやく定着した姿が示されている。柳風・一至・一石・東色・秀山などの人々が見える。遠く那須附近まで入っており、三城目が街道沿いの宿駅（関街道）の、取引関係が、すでに医王野から、黒羽にさかんな交流を示している。同四年江戸の巽我と鬼丸が『吾妻海道』を、同五年には名古屋の馬州が『奥羽笠』、江戸の黒露が『寿々梨沢』を、寛保二年（一七四二）与謝野蕪村が『新花かつみ』に、陸奥の旅をしている。須賀川俳壇には、等躬のあとを継ぐ藤井晋流が、其角門の偉才として全国に知られ、安積・安達・田村・白川に門弟を持って活躍しているが、矢吹には須賀川をすぐ前にしているためか、あるいは杖をとどめる程の俳人が居ないためか、いずれも宿の名を記すだけにすぎない。

このころ石川に末哲庵文窓こと英夕が現われる。石川郡を中心として活躍する。藤井晋流は、主に江戸に生活して、県内各地方に俳社がおきる。矢吹は白河の溝口英翁門と思われる英夕の流派に属したかと思われる。寛延四年（一七五二）刊行の『不断桜』に、三城目の英立・英風・英松などの俳人の名が載せてある。

宝暦三年（一七五三）には、白川俳壇の隆勢を示すように、和知風光の『宗祇戻し』が出版される。同八年（一七五八）加賀の既台が通った『孤一重』、同十三年京の蝶夢が奥羽の行脚を行い『松島道の記』を、明和三年（一七六六）には、

蓼太の『草鞋供養』、同六年には名古屋の蝶羅、江戸の嵐亭が『松のわらひ、合飲のいびき』を、同七年に名古屋の眺台が『しをり萩』、安永二年（一七七三）加舎白雄が『奥羽紀行』、同年須賀川で晋流のあとを継いだ二階堂桃鼠（祖）が、『のきのくり』を出版する。天明年間（一七八一～一七八九）以降須賀川・郡山・本宮・二本松に俳諧がさかんとになり、出版物が数多く出てくる。俳諧が庄屋・名主・僧侶・神主などを主体とした村内上層の人々の常識と化するが、矢吹の俳人は少ない。

寛政十二年（一八〇〇）秋、大坂の大江丸が、八一歳の高齢で奥州行脚で福島まで来ている。『あがたの三月・四月』には、矢吹の中嶋屋に一泊のことが記されている（本文は『矢吹町史』3巻に掲載）。大江丸は飛脚問屋島屋組の大和屋宗二である。矢吹宿中嶋屋は、嘉永五年（一八五二）「当宿方之覚」につきのようにみえている。

元中嶋甚六ト申屋敷、甚六子甚左衛門、子前之佐市、共兄弟上ノ小林主水ハ中嶋屋ヨリ別面、甚左衛門代ニハ松前御鷹宿、年寄役ニ成候、其後嶋屋、京屋宿申請、此宿元ハ中緑屋株也、下新田庄屋役相勤云々

飛脚問屋株は、はじめ中緑屋にあり、次に中嶋屋に移っていたことが知られる。

大江丸の福島行きは、飛脚問屋の業務査察を兼ねた旅行でもあり、俳友半輪の奥州行脚より江戸への帰りを小田川宿で再会、矢吹の中嶋屋まで戻らせ、俳諧一卷を物しているが、地元の俳人や、宿の主人などの出席のことはみえない。

『続々紀行文集』にある『奥の荒海』は、岡田士聞妻女の奥州道中記である。その一泊した宿として矢吹宿の名がみえる。おそらく公式の旅りと女性のこと故に本陣に宿泊したのであろう。

寛政二年（一七九〇）七月、水戸より矢吹に寛政三奇人のひとり高山彦九郎が、棚倉を経て矢吹を通っている。『北行日記―千々和実編』、同年十一月帰路に奥州道中、白河の関を越えている。十一月十一日つぎのような記事がある。

久来石を経て又夕売里四丁にして矢吹駅石川郡也。中略。駅の出口左り義経旗かけ桜、本田能登守殿隠居の跡也。中略。中島新田、大和久、踏瀬皆馬尺となる。四つ屋とて家三軒有り。是を経て大田川是れも馬尺となる。矢吹より二里八丁坤にくる。

中島・大和久などの農村が、いずれも農業をつとめず、馬尺（馬借）をして、街道稼ぎを主業としていることを記して

いる。近世末期の農村経済の破綻の姿を見せ、駄賃稼ぎ・日用取りの状態であったことが如実に示されている。

同十二年には伊能忠敬が、幕命による蝦夷地測量の帰途に通った。明和九年（一七七二）四月、文人画家として江戸にあった中山高陽が、奥羽旅行に下り、各地の書家・画家・俳人・文人たちに刺激を与えながら旅行している。往きには矢吹を通過して立ち寄らないが、帰路の十月二十日、矢吹の緑屋に一泊している。しかし、矢吹では誰とも書画の交りをもっていない。嘉永五年の「当宿方家之覚」には緑屋の名が見え、二代目で鎮守の上門にあり、とされている。中山高陽の宿泊後六〇年、矢吹町は数多い火災もあるので、明らかでないが、この緑屋半兵衛に宿泊したのであろう。

広瀬典（蒙斎）は、白川藩の儒者として松平定信に仕え、『集古十種』、『白川古事考』、『白川風土記』を編集し、藩校敬学館教授をつとめて、会津・二本松・三春の諸藩に大きな影響を与え、また感忠銘、白川古閑跡などに名を残した人物である。

『松崎懐堂日録』の文政六年（一八二三）六月四日の条に、「広以寧、近く可遊録を治むる事を云う」とあって、『近治可遊録』の編述のことがみえる。この書は白川にあった広瀬典を訪れた当時の有名な儒者、および藩内の学者たちが、白川領内の各所を探勝した文章を集めたものである。このなかから矢吹に関する文を拾って見よう（『須賀川市史編集資料』第二十八集）。

三城目村を過ぐ。村人道に迎う。坂を下れば冗然として、三峯の城郭刻画、その古墟たる間はずして知るべし、畑生は如古。住いて之を田夫に問ふに知らず。これを刀を帯びた者に問ふ。乃ち曰く中畑上野介の居る所、田間の溪流を経て村正着袴、一刀を帯びて迎う、その家に至り言を請う前の者の申す通りであった。ここに舟を放つて瀑下に到り憩う。食事を終り茶を喫し、すなわち舟を渡頭に命じて、直ちに清流を下る。

太田川・踏瀬・四谷を通り、松並木をすぎ、大和久より右折、途中牧馬の群りなど風光を記し、三城目村より舟に乗り、竜崎にて、乙字ガ滝を見た記行文である。帰途は成田村より徒歩、ふたたび三城目村に戻っている。



奥州道中記（十返舎一九）

三城目村に到り村正の家に憩う。其先天正年間一城の主として、この地を領すと云ふ、家藏の矢籠及鞍具古色愛すへじ、にこり酒、野肴の下物を供される、真率喜ふへし、所謂御霊祠なるものは鎌倉権五郎景政を祀ると云ふ、側に古き寺あり景政寺と称す、景政及び其族人の遺墨数幅を見る

とあり、三城目伊藤家にての款待の有様が記されている。

自白河至須賀川（江戸の儒者松崎慊堂）

松崎慊堂は、明和八年（一七七二）熊本に生まれ、江戸に出て林述斎の門に入り、佐藤一斎と共に塾友として励み、一生交りをつづけ、享和元年（一八四四）、全国に数多くの門弟を育て七三歳で没した。特に広瀬・渡辺華山と親しかった。鏡沼の常松仲遷（収蔵・菊畦）は、師礼をとっていた。白河に広瀬を訪ね、そのついでに常松家を訪ねた時の文である。「中畑、矢吹、久来石、笠石の四駅を経」とあり、矢吹には通過の宿名だけ記されている。

文化十年（一八一三）〜文化十一年にかけて、東海道中膝栗毛の弥次郎兵衛、喜多八の道中記で知られた十返舎一九は、人物名を替えて常陸道中記から、奥州道中記、越後道中記と書きまわっている。もともと白川以北の事は、歩いたことがなく間違いもあることを、正直に断わりながら、白川・根田・太田川・踏瀬・大和久とたどり、麦つきの女房をかからかい、新田では、老婆や犬にからかわれる文句、矢吹では、名物として大根蕎麦のことを書き立てている（『矢吹町史』3巻（資料編Ⅱ41五五四）。いずれも当時一



天和2年 キリシタン制札(神田 藤井ハル蔵)

般化して販売された、諸国道中記の宿場名にからました、想像物語りである。

総じて矢吹の文化は、須賀川におくれを取らざるをえなかったが、限られた人として中島の岡崎・小針両家が目立っている。寛政四年(一七九二)須賀川御所宮神社に句碑を建立した岡崎栄斧をはじめ、その子の幽篁、小針子尋など、幕末期の活躍が見られる。三城目・中畑が矢吹に比較して上位にあるといつてよいが、庄屋、僧侶など村の上層部のみの文化担当者で、庶民は見られない後進性があった。

(田中 正能)

二 信 仰

(一) 信 仰 の 姿

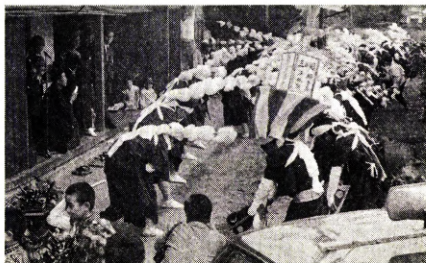
近世の信仰

近世の宗教、とりわけ仏教は、幕藩封建制のもとに組みこまれ、幕府―本寺―末寺―壇家と一元支配に編制された。徳川幕府以前の庶民と宗教

に宗教は盲従させられた。寺院の僧侶は支配機構の末端につらなり、庶民側でなく支配者側となり、収奪のみを考えればよい僧侶と化しおわった。

幕府の宗教統制は、幕府創立期の寺院法度の制定、神社関係では吉田唯一神道の公認によって骨格を形づくられた。寛永期までに本末制度を規定し、寛永十四年の天草の農民争乱を名目として、キリシタン禁圧を強化、宗門人別帳を制度化させ、始めてこの頃から寺々に過去帳が備えられる。

宗門人別帳の出現は嫁取り、婿養子・奉公・旅行・出生・死亡すべて壇那寺の証明を要する仕組となり、農民は、領主



三城目 平歟おどり



中畑原宿 二十三世講

氏子講などより数が多い、農民たちが寺・神をはなれて、現世利益祈願の、いわゆる民間信仰だけを残している。

農民の間に根ざした諸神仏を祀り信仰の対象とする陰陽五行思想、日待・月待など地域ごとの信仰であり、組織的指導者などをもっていない。野の仏といわれる信仰である。山神、水神、荒神、天神、雷神、風神、子安観音、馬頭観音、不動、地藏、薬師、庚申、大黒、弁天、二十三世、十九夜、道祖などの神仏の信仰は、いずれも修験の人たちによって根強い信仰に育った。陰陽や干支にちなんで行われており、順

番に宿を定め、夜間を主にして、会合、飲食を持ちより念仏や真言呪をとえ、あとは娯楽的色彩が濃くなるが、村内一戸一人の出席ともなつて、苦しい農村生活の潤滑油的心の支えの信仰となつていた。

とりわけ泉崎の鳥峠稲荷、岩瀬・安積両郡の妙見社の種替い、田村郡東堂山の馬産、養蚕祈願など他領地の信仰もさかんであった。松平定信時代に奨励された須賀川道祈神、小田倉道祖神など強制的信仰などもあった。女子の年齢集団信仰である二十三夜・十九夜および粟島信仰、男子達のみの庚申、那須白湯山、古峯、出羽三山、伊勢など他国信仰も入っているが、いずれも近世農民の信仰は、寺院、神社を信仰の対象とはせずに、農村、農民経済の貧窮は、現世利益的信仰がかえつて盛大であつたという特長をもつ。

三城目に伝わる、三匹獅子舞（根宿・須乗新田にもあった）・平鍛おどり、原宿の二十三夜講、いずれもが修験の人々によって、近世中期に農作祈願、疫病除けとして現世利益的な信仰を土台に成立していることでも明らかである。中世以降の蛭児信仰も近世に生きていた。

僧侶の説経、神主の神の道より、耕作に直接影響する神仏信仰、職業的信仰に熱中し、接統するのが近世の信仰であった。

(二) 絵馬

絵馬祈願

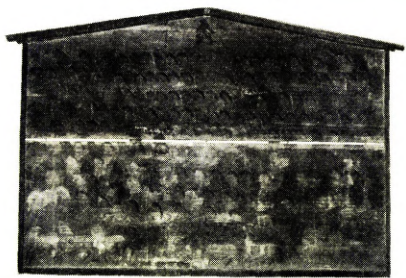
神仏に祈願したり感謝の心をあらわすため奉納して社頭に掲げる板絵や文字を総称して絵馬といっている。絵馬祈願は、かなり古くからおこなわれたが、矢吹町に現存するものは近世後期から明治期のものが多い、絵馬は社寺に生きている馬を奉納したのがそのはじまりで、変じて板に馬の絵をかいて奉納するようになったといわれているが明らかでない。

絵馬には、小絵馬と額絵馬（大絵馬）があり、小絵馬は、奉納者の男女別、姓名、年齢、奉納年月などしるし、祈願の趣旨を絵や文字で書くことが普通であった。病気の平癒を願ったり、家内の安全や繁栄、農作物の豊作、また農家で重要な財産であった牛馬の安全のためなど、さまざま祈りを込めて、また災難などがあると、祈禱師きとうしなどの宣託せんたくをうけて近郷の社寺をまわり、小絵馬を奉納することもあった。この小絵馬は、無名の民間の画工や村の絵の上手な人が書くことが多く、信仰の習俗とは別に、絵そのものに風俗画などとして貴重なものがある。

額絵馬（大絵馬）は、著名な絵師などに注文して、馬の絵に奉納者名をしるし記念として奉納したり、大願成就たいがんじょうじゆの御礼として、絵そのものを奉納することが多かったようである。そのほか俳諧や和歌の納額もあり、美術や文学の資料として貴重である。また実物をミニチュアにした工芸品などもみられる、なお、矢吹町には、他地域にみられる算額（和算の解法などしるしたもの）は現在のみあたらない。



明新観音堂（明新地内）



馬 絵（明新観音堂）

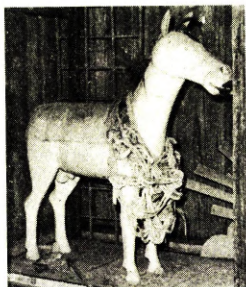
矢吹の絵馬

矢吹の村々の社寺
の拝殿や堂内に奉

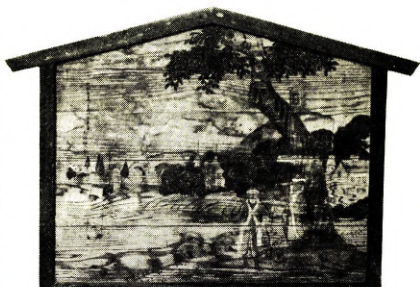
納されている絵馬は、紀年銘のあるものでは元文二年（一七三二）の句額が最も古く、ほとんどがそれ以後のもので明治期のものが多い。保存状態がいずれもあまり良くないため剥落（はくらく）しているのが多いのは残念である。

次に、その主なものを社寺ごとに観察すると、明新の観音堂にある絵馬の中で最も古いものは、文政七年（一八二四）卯月吉日と年号のある馬絵の絵馬である。これは家形の（約七二センチ

チ×一・一七センチ）板に二・二四頭の馬が書かれ鹿毛、青毛、白毛の彩色がほどこされ、中野目村円谷など願主名と思われる名前が数カ所に書かれている。また嘉永五年（一八五二）の家形（約六七センチ×九四センチ）の異国風景絵馬は、洋館と港の見える丘の大本の下に唐人と思われる二人の人物が立ち、港には黒船が浮び、異国情緒をただよわせた当時としては珍しい風景画である。寄進者名や奉納の文字はなく、虎好仙人彩の款識と年号のみ書かれている。虎好仙人の名は他にはなく旅の絵師が書いたものか、あるいは嘉永七年二月に、中野目村庄屋門谷春平、中畑村庄屋小針発右衛門（子癰・後述）の二人が領主の命をうけ、異国船渡来のため警備として出府しているので、その時江戸で買求め記念に奉納したものでなかろうか、とにかく彩色をほどこした異国風景は村人を驚かせたことであろう。（口絵参照）



神馬（明新観音堂）



異国風景（明新観音堂）



鞍馬山（中畑根津 権現神社）

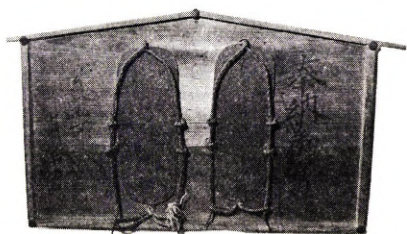
そのほかここには、作年代は不明であるが塑像神馬一体と馬絵の小絵馬一四面が奉納されていて明治期のものが多い。ほかに馬字千字（四四センチ×七七センチ）が一面あり近郷の馬産地の信仰を集めていたものと思われる。

中畑根津権現神社は、その縁起は古いが堂宇が改築されているので失われたものも多いと考えられるが、ここには嘉永四年（一八五一）亥十二月奉納の鞍馬山の額絵馬（約六二センチ×一二三センチ）がある。寄進者は棚倉藩中川上善内、山田鉄兵衛、竹内平助とあり、彩色で保存状態がよく画は白竜楽山筆と款識されている。ほかに安政五年（一八五八）奉納の鉄

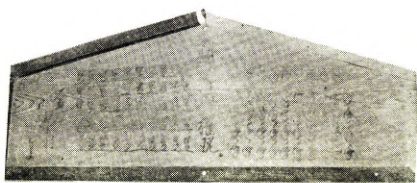
の草鞋、「手」・「足」の文字五〇字を一面に書き石河郡沢尻村里よが奉納した文字絵馬、唐箕と万石の実物模型、征露凱旋祈願、子供の養育、婦人の祈り、天狗の図、牡丹の絵、神前の図などの小絵馬が奉納されている、ここには馬の絵馬はなくさまざまな祈りや願いの絵馬が多い。

中畑根宿館山の山頂にある観音堂には、寛政七年（一七九五）十一月小針氏奉納の雄馬の絵馬（四〇センチ×六〇センチ）が納められている。これは一筆がきの力強いタッチでかかっているもので絵師名はないが秀作で保存状態もよく貴重であろう。

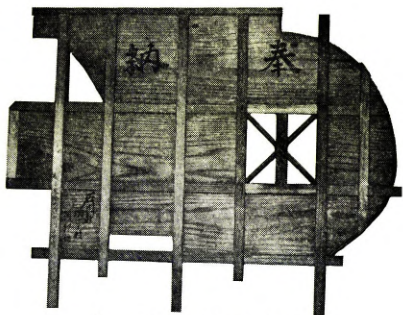
また、中畑陣屋代官本姓小針事井上周平豊章奉納と裏面に墨書銘のある絵馬（七四センチ×九〇センチ）は、井上周平の在任時期から天保期と類推されるが、絵面は磨滅がはなはだしく、その輪郭が判明する程度であるが、日の出に富士山、手前に竜と波がかかれて金箔などの彩色のあとも残っている。落款もあるが判読できない、名のある絵師によるかナリの作品であったかも知れないが磨滅が惜しまれる。なおこの堂内には、不揃えの木片（約三〇センチ×三〇センチ内外）にかかれた百人一首の絵馬が四五枚残されていて、歌と人物絵が彩色をほどこしてある。作者・奉納者・年代ともに不明であるが百枚奉納の一部が残ったものだろうか。また元治二年（一八六五）の観音堂由来と歌額があり七首の和歌がそえられている。額中子葬ちかのりとあるのは中畑村庄屋小針堯右衛門光澄で書画をよくし歌も詠む文人であった。ほかに馬絵のもの



鉄草鞋（中畑根津 権現神社）



文字絵馬（中畑根津 権現神社）



唐 箕（中畑根津 権現神社）



中畑根宿 観音堂



馬 絵 (根宿 観音堂)

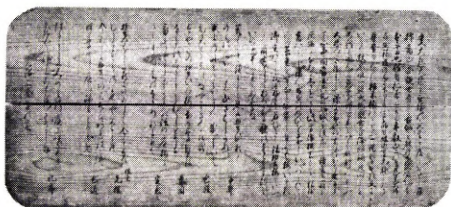


百人一首 (根宿 観音堂)

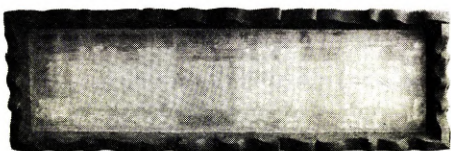
数点が納められているが明治期のものが多い。

観音堂と同じ館山の中畑八幡神社の絵馬は明治期のもので、明治五年伊勢参宮連中によって奉納された羅生門（渡辺綱の図）（一六〇センチ×二一〇センチ）の額絵馬は幽篁^{ゆうゑ}の落款がある。幽篁は中畑村の岡崎長左衛門で庄屋をつとめ文人であった。また原宿・平鉢の大山講中の人々によって奉納された日本海々戦図（一四〇センチ×二三〇センチ）は、竹堂と款識があり、同村岡崎長三郎（長左衛門の弟）がかいたものである。ほかに松・竹・藤と鷹の彫刻の献額（六五センチ×九〇センチ）と明治三年の「奉四季句合」の俳句額が掲げられている（『目でみる矢吹町史』）。

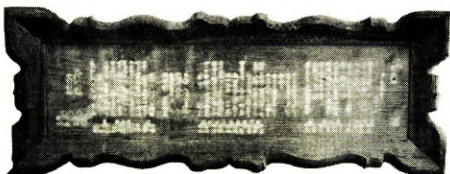
三城目御霊神社には、矢吹町の現存する紀年銘のある絵馬の中で最も古い元文二年（一七三七）の句額が二面あり白河・



観音堂由来（根宿 観音堂）



句 額（三城目 御霊神社）



句 額（三城目 御霊神社）



高 砂（中野目 八坂神社）

須賀川などの人々とともに三城目伊藤氏など地元の人々の名もみえ、文学資料として貴重である（『矢吹町史』3巻、資料。藤
ほかに大畑住吉八幡神社には櫛の自然板に平安朝風の絵のある絵馬があり年代不詳であるが新しいものと思われる。藤
文伊の款識がある。同社には狐絵の小絵馬もある。また大和久日吉神社には、俳諧の献額が二面あり七六句がかかれ、須
賀川の市原多代女をはじめ、大和久や近郷の俳人の名があるが現在では磨滅して判読できない。奉納年月も嘉永としか読め
ない。大池三光稲荷神社には三光神社真景（元治年間の景）などがある。中野目八坂神社の高砂の図小絵馬がほほえまし
い。

（藤田 正雄）